

氏名	栗田 絵莉子
ヨミガナ	クリタ エリコ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第515号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 中等教育における「探求」する美術教育 —デューイの経験論と玉川学園での実践を手がかりに— 〈作品〉 ・追憶のガラス あとかた ・追憶のガラス 追憶するガラス達 ・追憶のガラス 記憶の船

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小松 佳代子
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	本郷 寛
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	木津 文哉
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	藤原 信幸
（副査）	大東文化大学	准教授		上野 正道

（論文内容の要旨）

本論文は、美術の制作活動は人間の「探求」活動であるという考えのもと、美術の表現活動がどのような「探求」活動であるかを、理論と実践経験を交えながら構造的に解明することを試み、さらに中等教育における美術活動に「探求」を取り入れることの意義と可能性を考察したものである。

筆者は、現在、美術を専門的に学び表現者として活動する立場と、子ども達に美術を教える教師としての立場、さらに美術教育について研究するという3つの立場を持っている。表現者として制作活動をする中で、美術の表現活動が「探求」活動そのものであると考え実践してきた。しかし、教育現場において、美術を自ら「探求」し、その中で作品を制作し発表する時間であるという認識は、子ども達や保護者、更には社会全体から持たれていないという現状がある。美術の授業は、既にある専門的な知識や技術を教え教わるもの、あるいは、制作するという身体活動そのものに意味があり、作品は副産物とするもの、さらには主要5教科とは異なり心身的開放を味わえるものとして認識されていると、教育者の立場から感じるが多々ある。このような認識が広まる美術教育において、今一度、美術の活動の意義を問い直し、美術の「探求」活動によって人々にどのような成長があるのか、さらに、アイデンティティの形成がなされる中等教育段階の学校教育の中で美術を「探求」する経験を持つことの意味と価値を明らかにする。美術を「探求」する具体的な方法を探るにあたり、玉川学園での「探求」型学習の実践を検討し、中等教育における「探求」する美術教育の可能性を総体的に捉えることを目指した。

第一章では、教育と美術における「探求」を、哲学者、教育者、心理学者として20世紀に活躍し、芸術論を展開したジョン・デューイの思想を手がかりに考察した。デューイは人間の知性や論理性の伴う能動的な思考による問題解決に「探求」を見ていたが、晩年になるにつれて、衝動や感情、感覚といった非合理的要素における「生の活動」が「探求」の根底にあるというように思想が展開していく。『経験としての芸術』でデューイは、すべての経験は衝動性として始まるとし、芸術が衝動性から始まることから、非合理的要素の伴う「生の活動」が表現活動の根底に敷かれるとしている。他方で、芸術における「表現」は、衝動や感情の直接的発散とは異なり、客観的事物と行動の組織化を伴うとしている。デューイのいう、芸術活動には、客観的、論理的思考を伴う科学的探求と、主観的、非論理的なもう一つの「探求」の双方があり、それらが「生の活動」として一つの「探求」としてまとめあげられることが明らかとなった。

同じく美術の表現活動を人間の総合的な活動としたヴィクター・ローウェンフェルドの芸術論を手がかりに、第二章では、美術の「探求」活動の構造化を行った。ローウェンフェルドのいう創作活動における7つの成長の要素と、思考、感情、知覚の関係性を、自らの制作活動と照らし合わせながら具体的に考察を行った。美術の表現活動が人間の全体的な成長を促す包括的な活動であり、「外的」素材に対する合理的思考を用いた科学的探求と、衝動や感情といった非合理的な「内的」素材による創造的探求が並行して行われていることで実際の表現活動としての美術の「探求」が成立することを明らかにした。さらに、表現活動における「内省」の役割についての考察を試みた。「内省」は、科学的探求によって「外的」素材から得た思考と創造的探求の「内的」素材を統合し、新たな「創造性」を「探求」の中に生じさせる可能性を述べた。

第三章では、自己の内的な成長と、外的要素を取り入れて成長する青年期の子ども達における「内」と「外」との葛藤と、美術の「探求」による「内」と「外」との組織化との間に類似性が存在することから、青年期におけるアイデンティティの形成に美術の「探求」が果たす役割について考察を行った。具体的には、筆者が現在教育活動に携わっている玉川学園の国際バカロレアクラス的美術科と自由研究の「探求」型学習の実践を比較し、2つの「探求」型学習から、それぞれの「探求」の特徴と、それが生徒や生徒の作品に与える影響を明らかにした。

以上のように、本論文は、美術を「探求」する活動が、表現、制作活動において人間の内的世界にどのように作用するかを表現者である立場から考察し、教育者の立場からそれらが教育現場で実践されることによる教育的価値を論じたものである。子ども達一人一人がそれぞれ能動的に美術を「探求」し、美術を通じて自己の「内的」素材と対峙することができれば、子ども達のアイデンティティ形成に美術は寄り添うこととなる。本論文は、人々が美術の価値を認め、愛好することが出来る社会を作り上げることの可能性を「探求」する美術教育によって一提示したものである。

#### (論文審査結果の要旨)

申請論文は、美術活動が人間の「探求」活動であるという考えから、特に中等教育における美術教育に「探求」活動を取り入れることの意義と可能性を考察したものである。申請者は、博士課程に入学して以来、一貫して国際バカロレアにおける美術教育について研究を進めてきた。入学当初は国際バカロレア教育の優位性に注目して研究を進めていたが、博士課程3年間の制作研究・理論研究・教育の実践活動を通して、中等教育における「探求」する美術教育という広い視野から国際バカロレア教育についても客観的に考察するようになった。その結果が、今回の申請論文である。

本論文は以下のような特徴をもつ。第一に、「探求」する美術教育を考えるために、アメリカの哲学者・教育学者であるジョン・デューイの経験論・芸術論を取り上げている点である。デューイ哲学についての研究は多々あるが、その芸術論をしかも「探求」という視点から取り上げる研究はほとんどなく、本論文のオリジナリティを示していると言える。第二に、自己の制作過程における「探求」活動を詳細に分析し、制作者の立場から見た美術教育の重要性について論じている点である。そして第三に、申請者自身が教育活動に携わっている経験から、実際の教育現場における「探求」活動を具体的に論じている点が挙げられる。

近年の教育政策において「言語活動の充実」や「アクティブ・ラーニング」など、探究型学習が注目されている。申請論文は、そうした動向をふまえながらも単にそれに適応するのではなく、美術教育に独自の「探求」活動を捉えようとしている。美術には、客観的・論理的思考を伴う「科学的探求」と、衝動や感情といった非合理的な内的活動に基づく「創造的探求」とが並行して統合的に行われるところにその特徴がある。申請者が「探究」よりも広い概念である「探求」という語を用いているのもそれ故である。

以上のように本論文は、研究者・制作者・教育者という複数の視点から美術教育を捉えるという特徴もっている。本論文では玉川学園という一つの私立学校の実践に着目しているが、今後公立学校も含めて、義務教育における美術教育について考えていくための起点となる、可能性に開かれた論文であると言える。以上のような点から審査会において、課程博士論文としての水準に十分達していると審査員全員一致で評価し合格とした。

#### (作品審査結果の要旨)

ガラスによるキャストイングの作品である本作は、申請者の本学における集大成的な意味合いを持った作品である。ソーダガラスを素材に用い、行李の表面の形を中子に据え、「追憶」をキーワードにイメージを膨らませた作品形態となった。

本学入学以来、ガラスの造形表現に取り組んできた中で、最大級の大きさでのガラス鑄造を試み、持てる能力のすべてをつぎ込んでの制作となった。制作時には亀裂と形成作業の限界に挑んだ、といっても過言ではないほど大変な作業である。

作業としての鑄造、手仕事による磨き、両者のバランスの取れた仕上がりになっており、その作品の面影は、結果として一種独特の風格を漂わせるものとなった。研究の過程での紆余曲折を乗り越え、重量感あふれる完成度はまさに作者独特の表現を獲得しており、好感の持てる表情・そこに至る根気と集中力などが扱いに慎重さを要するガラス独特の美しさを獲得しており、審査員全員の評価の一致を見て、博士号取得に値する作品であるとされ、合格とした。

#### (総合審査結果の要旨)

申請者は、本学修士課程のガラス造形研究室で学び、その後玉川学園で非常勤講師として勤めるなかで出会った国際バカロレアの美術教育から現在の美術教育の問題を考えるために本学博士課程美術教育研究室に入学した。修了作品及び申請論文はこうした自らの制作活動と教育実践をもとに3年間研究を深めてきた成果である。

制作については、以前より制作を続けてきたガラスの内部に何かを閉じ込めるという制作スタイルを展開し、自らが制作活動をするに至る原点となった祖母との思い出を形にするということを目指した。祖母の家にあった古い行李を型どりしそこに洋裁家であった祖母の使っていた布地を閉じ込めた作品、行李と洋裁道具をガラスに置き換えたものと布とを組み合わせてインスタレーションとして展示した作品、また実際の洋裁道具をガラスの内部に閉じ込めた小品を展示した。ガラス作品としては大きく、箱型のものは徐冷に時間がかかるという困難な制作工程を乗り越えて、大学美術館1階のエントランス全体を使った作品群は、ガラス素材の静謐さとその形状や内部に置かれた道具から時間の経過を感じさせる魅力ある作品となった。

申請論文は、美術活動が人間の「探求」活動であるという考えから、特に中等教育における美術活動に「探求」を取り入れることの意義と可能性を考察したものである。「探求」についての理論的考察として、第一章ではアメリカの哲学者・教育者であるジョン・デューイの経験論・芸術論を取り上げた。デューイの研究は数多あるが、その芸術論を「探求」という視点から読み解いたものは世界的に見ても殆どないという意味で独自性が認められる。第二章では美術の表現活動を人間の総合的な活動とみていたヴィクター・ローウェンフェルドの芸術論を参照しつつ、自らの制作行為における「探求」活動を客観化している。第三章では、美術の「探究」活動と中等教育段階にある子どもたちのアイデンティティ形成とを重ね合わせることで、中等教育段階における「探求」する美術教育の具体相に迫っている。申請者自身が教育活動に携わっている玉川学園の国際バカロレアクラスの美術科の「探求」活動と、玉川学園の創設期から行われている「自由研究」における「探求」とを比較しつつ、美術教育における「探求」の可能性を総合的に捉えようとしている。博士修了作品をめぐって自らの「探求」の過程を記した補論も含めて、研究者・制作者・教育者という複数の視点から美術教育を捉えるという点で本論文は他にはない特徴をもつ。美術制作者が教育に関わるという点においても、また制作と研究とをつなぐという点においても、今後の美術教育にとって意義ある論文と言える。最終試験の結果も含めて、総合審査結果として課程博士学位に相応しい水準に達していることが認められ、審査員全員一致で合格と判定した。